

きる。また、生業活動、農耕儀礼において女性の役割は不可欠であるため、生殖能力に関らず寡婦の再婚が可能であるという。

北インドのウッタル・プラデーシュ州のある農村では、寡婦と既婚女性は「凶／吉なる女性」として対照され、各々が身にまとう「白／赤」色のサリーが生命力やセクシュアリティのシンボルとなっている。寡婦の再婚は高カーストでは禁止されていることが多いが、近年低カーストでは寡婦が愛人となる例がみられるという。従来女性の属するカーストが男性よりも上位に位置する男女の組合せは周囲の猛反発を引き起こしたが、近年カースト間の社会・経済的格差が縮小傾向にあり、カーストを超えた結婚も増加している。しかし依然寡婦の行動規範は高カーストに属する女性ほど厳しく求められるといふ。

第3部では寡婦に課された倫理観について、中国の漢族女性、戦後日本の「未亡人」を取り上げている。清朝末期までは、寡婦がやもめを守り通すことを社会道徳として奨励し、寡婦を記念する「牌楼」(門状の建造物)が建造されていた。今日でもそうした理念は貧しい庶民層よりも、富裕層ないし都

市部において支持される傾向がある。また日本では、第二次世界大戦中夫を戦争で失った寡婦は「戦争未亡人」として政策上特別な待遇を受けてきた。彼女たちは、戦時中総力戦体制を鼓舞する存在として、戦後は戦争の被害者、性的失業者、同情を誘う保険外交員適任者として公共圏において語られてきたという。

第4部では社会の変容に伴い、寡婦の処遇もまた変化している模様を描いている。かつて韓国では、寡婦は強力な儒教イデオロギーと厳格な外婚規制のため再婚は困難であった。さらに氏族イデオロギーと結びついた「戸主制度」が韓国統監府により確立され、女性は幾重もの制度に囮まれてきた。しかし近年「男女平等」「人権」というグローバルな価値と父系出自原理を民族の伝統として賞揚するローカルな価値観の対立が起こり、ついに法的に父系出自原理を支えてきた基本的規定が廃止された。

パプアニューギニアのマヌス社会では、しばしば女性が寡婦となったのちに亡父側親族集団から婚資が支払われる。寡婦は婚資を受け取ると亡夫の親族と相互関係を継続させねばならないものの、千日間の服喪期間を経れば自

由に再婚することが可能だという。最後に、インドネシア・ブギス社会ではやもめを死別、離婚を問わず同一の語で称する。やもめに対する画一的呼称の理由を検討すると、当地の妻方居住に起因するとみられる夫婦間の絆の脆弱さ、母子世帯の多さ、家族イデオロギーの欠落といった問題が顕在化していくという。

以上、各章に限り内容を要約して紹

介した。本書に登場する「やもめ」たちが、結婚制度、慣習、宗教、そしてグローバリゼーションに従いまた抗う生き様は、親しみやすい「やもめ」として読者の胸に迫ることであろう。また、各章の軽やかなタッチに乗って、15社会にわたる「やもめ」の営みをぐるりと一望できる。是非一読をお勧めしたい。

(横田祥子)

住用村誌編集委員会(鹿児島県) 編集・発行

『わきゃシマぬあゆみ～住用村の歴史と暮らし～』 第1集

2005年11月 発行

現在、行政上に住用村という名はなくなっている。それは、2006年3月20日から、住用村が名瀬市と笠利町と合併し、奄美市になったからである。本書は、いわゆる平成の市町村大合併の直前に刊行されたもので、発行の意図もそこにあったことをうかがうことができる。

さて、本書の構成は2部である。第1部は「暮らしの移りかわり」(1～105頁)、第2部は「分野別年表と資料」(107～315頁)である。A4判でカラー、住み、そこで生活する「個人」に焦点